

菓子栞研究に関する覚書

兼岡理恵

はじめに―菓子栞とは―

本稿で扱う「菓子栞」とは、箱詰の菓子などに入っている、菓子の素材や由来などを説明した紙片のことである。この言葉自体は、『日本国語大辞典』はじめ、現在刊行されている辞書類には立項されていないが、ここでいう「栞」とは「不案内の人のためにわかりやすく説明した小冊子。案内書。手引書」（『日本国語大辞典』第二版）の意味である。菓子栞について、中山圭子は次のように述べている。^{〔1〕}

菓子を味わう折には、箱に添えられた栞にも目を通したい。ここでいう栞とは、菓子の由来となる伝説や和歌、素材の特徴や作り手の思いなどを解説した紙のこと。体裁はさまざまで、一枚紙、短冊、畳み紙などがあり、製造過程をカラー写真で紹介したり、筆文字でメッセージが書かれたりと、趣向が凝らされている。博覧会での受賞歴を明記したものなどは、菓子の履歴書のようなだ。思うに、日本ほど菓子の栞が浸透している国はないだろう。外国で地方の珍しい菓子を購入しても、栞のようなものを目にする機会はあまりない。菓子を紹介記事のコピーや簡単な説明書を渡される程度だ。栞の存在は、器物の由緒を重んじ、箱書きをし

たためるといった日本文化のありように関連しているのかもしれない。(傍線部・兼岡)

傍線部にあるように、菓子葉に記載される内容には、菓子の由来(その元になる伝説や和歌)、素材の特徴、作り手(店主)の菓子に対する思い、また菓子自体の価値を高めるための「博覧会の受賞歴」、あるいは「天皇陛下献上菓子」など、いわゆる「皇室ブランド」を示す表示などである。筆者は数年前から、この菓子葉を収集している。これまでの収集品は、現在販売されている菓子を中心だが、収集を始めた理由は、中山が述べるように、菓子葉は、その内容はもとより、和紙を使用したり巻物状にするなど趣向を凝らした体裁や、流麗なくずし字でしたためられた本文などの「様式」、さらに箱書き的な「機能」など、「日本文化のありよう」を示す格好の素材だと思われたからである。そして、筆者が専門とする日本古代文学・伝承文学においても、菓子葉に書かれた「由緒」や「伝承」をもとに研究や授業を行うことは出来ないか、と考え、二〇一三年度より駒澤大学文学部国文学科の選択専門科目「国文学特講Ⅰ」において、「菓子葉をひもとく」と題し、菓子葉を題材とした講義を担当している。また二〇一四年度は、千葉大学文学部開講科目「民俗・伝承論Ⅱ」でも、同テーマで講義を展開している。二〇一四年度駒澤大学「国文学特講Ⅰ」のシラバスは、次のようなものである。

日本各地には、地域の歴史・伝説にちなんだ名物が多く存在する。その中でも特質すべきは「お菓子」だろう。八つ橋、弁慶の力餅、姥が餅：そして多くの場合、それらには「菓子葉」が添えられ、菓子開発の苦勞、材料へのこだわり、味の特徴等が描かれ、菓子の美味しさを引き立てている。また、そこで語られる菓子由来は、如何にその菓子が由緒正しきものなのか、歴史・伝説上の人物を登場させつつ、本来の伝説とはかけ離れた形になっているものが殆どである。本講義では菓子葉をてがかりに、菓子にまつわる伝承、地域にお

ける伝承の形成過程など、様々な角度から考察してゆく。

講義では、主に菓子菓の「由来」「伝承」を中心にしているが、先述した通り、菓子菓は他にも様々な観点からアプローチが可能である。本稿では、この菓子菓を素材として、いかなる研究が展開しうるか、また授業において、これまで筆者が扱った事例を紹介しつつ、菓子菓を題材とした大学授業の可能性について検討したい。

一、菓子菓のルーツー引札

菓子菓がいつ頃誕生したか、その時期は明確ではないが、江戸時代に作成された「引札」にルーツがあることは確かだろう。引札とは、商品の宣伝や開店の披露などの主旨を書いて諸方へ配る広告の札のことである（『日本国語大辞典』第二版）。江戸時代初期までは「報条」「札まわし」「口上（書）」「目録（書）」などと呼ばれ、十八世紀中ごろに「引札」の語が生まれた。『近世風俗志』には、江戸では「引札」と呼ぶが、京坂では「ちらし」と呼んだと記されている。²その端緒は、天和三年（一六八三）に江戸の呉服商三井越後屋が、日本橋駿河町での開店に際して出した「現金安売掛値なし」とされている。次は、その越後屋が、明和九年（一七七二）二月の大火で焼失した後、同年十一月に営業再開した際の引札である。³

霜月朔日より見世開仕候に付

乍憚口上書を以奉申上候

益御機嫌能被遊御座目出度御儀奉存候。然者_{私店}呉服物木綿類一切古来より現銀掛直なく商売仕候所、不相

替御用向被為仰付被下置難有仕合奉存候。御蔭を以此度普請出来仕候に付御礼為冥加諸品悉相改格別下直に奉差上候間、御賑々敷御来駕被成下、不限多少御用向被為仰付被下置候様奉願上候。猶又乍憚御懇意様方えも右の段御風聴被成下候様奉願上候。以上。

辰十月

江戸するか町北かわ本店

越後屋八郎右衛門

御調被遊候品御意に入不申候はは取替差上可申候

この越後屋の引札はじめ、引札の文章には一つの定型がある。それは、まず受け手に対するご機嫌伺い、次に平素の御引き立てを感謝する前文、そして本文を述べ、後文では一層の蟲肩を願って終わるといふものである。⁽⁴⁾

このような定型化された引札の文体に、戯文の趣を取り入れたのが平賀源内である。源内による引札は、明和六年（一七六九）に作成された齒磨き粉「嗽石香」が嚆矢とされる。これは「トウザイ〜」と始まり、末尾が「皆様御蟲御取立にて段々繁昌仕、表店へ罷出て、金看板を輝かせ、今の難儀を昔語と御引立のほど隅からすみまでつらりと奉希上候。其為の御断左様にクハチ〜〜〜〜」と拍子木の音で結ばれる、芝居の口上を模したのものになっている。また、源内が作成した菓子⁽⁵⁾の引札として、安永四年（一七七五）、江戸両国回向院前に音羽屋多吉が開業した「清水餅」の開店披露に関するものがある。

きよみづもち

口上

世上の下戸様がたへ申上候。そも我朝の風俗にて、目出たき事にもちひの鏡、子もち、金もち、屋敷もち、

道具に長もち、魚に石もち、廓くわくに座もち、牽頭たいごもち、家持やかもちは哥かに名高く維茂これもち武勇かくれなし。かかるめでたき餅ゆゑに此度おもひつきたての器物もさっぱり清水餅、味は勿論よいくと御鼻眞御評判の御取もちにて、私身代もち直し、よろしき気もち心もち、嬢かかもやきもち打忘れ尻もちついて嬉しがるやら、重箱のすみから隅まで木に餅のなる御評判奉願上候。以上。

未四月

回向院前

音羽屋多吉

「清水餅」という商品にちなみ、「もち」に関する言葉を列挙した、いわゆる「物づくし」の趣向をとった文芸性に富んだものである。この源内以降、十八世紀から十九世紀にかけて、山東京伝・曲亭馬琴・式亭三馬・柳亭種彦・為永春水・烏亭焉馬、さらに仮名垣魯文など、数々の戯作者が各種引札を作成し、その稿料は彼等の貴重な財源になったとされている^⑥。

こうした江戸期の引札の文体は、現代の菓子菓にも引き継がれている。まず典型的な文体の例として、次に掲げるのは、岡山県銘菓として、同地出身の作家・内田百間の大好物であったことでも著名な「大手饅頭」（株式会社大手饅頭伊部屋）の菓子菓である。

①大手饅頭は天保八年（一八三七年）弊店の初代伊部屋永吉が、いまの営業地京橋町で創業しましたが、当時の備前藩主池田侯から特にご寵愛を受けお茶会の席には必ず伊部屋焼の茶器とともに愛用されてきました。大手饅頭の名称は、当店が岡山城大手門の附近にあったため藩侯からいただいたと伝えられております。

②その親しみやすい名前と、風味豊かな味わいは、当時の人たちに備前名物としてご好評をいただきましたまし

た。以来百七十余年ご贈答におみやげに引き続きご愛顧をいただいておりますことは、有難いことでございます。

③当店はこの伝統の味を失わないよう努力していく所存にございますれば、何卒一層のお引き立てを御願ひ申し上げます。

主人敬白

(文中の丸数字は、兼岡による)

この文章は①③の三段落から構成されている。すなわち①は、大手饅頭の由来について、②は商品愛顧に対する感謝、そして③は引き続きの愛顧を請うもので、現在の菓子菓の多くはこのスタイルをとる。そして末尾に「主人敬白」とあるように、本文の語り手は、主人(店主)であるのが一般的だが、中には、商品である菓子を擬人化し、菓子自体の自己紹介という形式をとる鳥取県倉吉市の「打吹公園だんご」(株式会社石谷精華堂)のような例もある。同葉は冒頭に「打吹公園だんごのたわごと」と題され、「私は名前を「打吹公園だんご」と申します」という一文で始まり、つづいて「生まれも育ちも「倉吉」で、明治十三年に生まれました。周囲には、東郷、羽合、三朝、関金と四つの温泉郷があり、中でも三朝温泉は世界有数のラジウム含有量を誇っています。私の名前の由来は、市の中心部にある打吹山です」と、同店舗の位置する倉吉の概説、だんご命名の由来、現在までの同店の歴史などが述べられ、末尾は「どうぞ幾久しく、鳥取県のおみやげとしてお忘れなく、いついつまでも御伴の叶いますよう、主人に代わってよろしく御願ひ申し上げます。敬白 打吹公園だんご 五代目店主 石谷団子」(傍線部・兼岡)と、「石谷(同店舗名) + 団子(だんご)」という名をもった「だんご」の一人語りというスタイルを貫いている。こうした、江戸時代の戯作者による引札の文体から連なるような例をはじめ

め、文体分析も、菓子菓研究の一つの視点だろう。

このように引札と同種のものとして考えられる菓子菓だが、その機能には大きな相違がある。それは、不特定多数の人々に配布され、商品を宣伝する「広告」的機能をもつ引札に対し、菓子菓は、基本的に菓子の箱や袋の中に入っているものであり、開封して初めて目にするものが出来るものである。すなわち菓子菓には、商品購入者（消費者）という特定された人々に対する「御礼」、さらに彼等に対し、リ、ピ、ターとしての愛顧を請うという機能に主眼が置かれている点である。この菓子菓の効果について、マーケティングの観点から、辻井良一は次のように述べている。⁽⁸⁾

老舗の菓子舗は、TV広告は打たないが、最中の箱の中に心のこもった菓が入っていて、その最中が「旨いわけ」をきちんと説明してくれている。それこそが評判のもとをつくり、ファンを育てていくAsset型マーケティングの原点である。

菓子菓は、菓子の素材へのこだわりや由来を述べることで、単に食して美味しいというだけではない、菓子の価値を付加し、購入者（消費者）の菓子に対する「関心」を高めるといふ効果を生み出しているといえよう。そして多くの菓子菓で中心に語られるのが、菓子の「由緒」である。なぜ菓子菓では由緒が滔々と語られるのだろう。次に、この「由緒」を語るといふ点について考察していく。

二、菓子「由緒」について

菓子菓の多くは、その菓子の名前や誕生の「由緒」の説明に力点がおかれている。たとえば、先掲した「大手饅頭」では、「岡山城大手門の附近にあったため藩侯から（大手饅頭の名を）いただいた」とある。また愛知県半田市「蜂蜜生せんべい」（株式会社総本家田中屋）は、薄いのし状の餅菓子であるが、その由緒について、菓子葉には次のように記されている。

生のせんべいを初めて口にしたのは徳川家康だった。永禄三年（約四五〇年前）の桶狭間の戦いで織田信長に追われた徳川家康はやむなく知多半島に逃げ込んだ。坂部（今の知多郡阿久比町）を通り、半田に着いた時には昼近く、疲労と空腹の為に兵馬ともへとへと。休息をとるために立ち寄った百姓家の庭先に干してあるせんべいを目にした家康は、生を承知であえてそれを食べ、美味であるとほめた。そして家康が半田に滞在している間は、その家の娘みつに生のまま献上するように申し付けた。再び家康に会い、心を奪われ一人ひそかに慕ったみつだったが、所詮届かぬ思いのはかなさを知り、知多の山の緑にかこまれた美しい池に姿を消した。その知らせに村人がかけつけた時、きらきら輝いていた雲母にちなみ、その後一枚一枚重ね合わせるせんべいを作るようになったと伝えられている。

主人敬白

桶狭間の戦いという史実を元に、身分違いの恋、乙女の入水という典型的な悲恋物語のモチーフによって語られるもので、「生のせんべいを初めて口にしたのは徳川家康」という点をはじめ、勿論、事実ではないだろう。しかしここでは、家康という歴史上著名な人物、そしてその半田との関わりに由緒を繋げることが、「生せんべ

い」の由緒を語る上で、不可欠なのである。このように、菓子はその地域の名物として定着するためには、「ものがたり」としての由緒が必要であることについて、鈴木勇一郎は次のように述べる。⁹⁾

名物たりうるには、その土地のものであるということの、何らかの由緒が必要となる。だが、その土地の材料で作られることが常に可能というわけではない。そこで「名所」や「伝説」などに依拠することで「由緒」を獲得し、名物としての地位を築くことになる。本来、名所というのは「ナドコロ」であり、中世末までは、和歌の歌枕に詠まれた、特に名の立った地、名高いところを指していた。したがって、歌に詠まれたナドコロは文学や神話、伝説に彩られた名所・旧跡が中心であった。つまり名所というのは、土地の知名度を高める重要な要素であり、名所としての知名度が高いほど、名物が生み出されていく素地が固まっていくという構造を持っている。

由緒を重んじるという点は、物事の起源を語る神話や伝説、また寺社縁起などに通じるものである。さらに菓子葉には、菓子の「由緒」とともに、その「効能」について語られる場合もある。この点に関して、熊倉功夫は次のように述べる。¹⁰⁾

名所には由緒がついてきます。その所にまつわる物語です。この物語が日本人は大好きです。むしろ実体よりも物語好きといってもよいでしょう。名物も同じこと。いわく因縁、故事来歴といいますが、長々とした由緒書がついている名物菓子も少なくありません。由緒を読みますと、厄除けの功德があるとか、長寿が保ると書いてありますから、お菓子も一段とおいしく感じられます。(傍線部・兼岡)

このような「効能付き」の菓子は、寺社参詣の土産とされる菓子里に多く見受けられる。たとえば、愛知県津島

市の「あかだ」は、疫病や厄除けで名高い津島神社の参詣土産として『尾張名所図会』にも描かれる、米粉を丸めて揚げた菓子である。あかだを製造・販売する店舗は往時は一〇軒以上存在したが、現在は三軒（あかだ屋清七、角政、松屋儀左衛門）のみである。¹¹⁾ その由緒は、弘化年間、弘法大師が津島神社に訪れた折、この地で疫病が流行していたため悪疫退散の祈願をし、神社の供米をもとに米団子の揚げたものを作り、これを神前に供えて人々に分け与えたところ、たちまち疫病が平癒したという。以来、津島神社の春秋に行われる県祭りの際、神前の供米から団子を作って「県団子」と称し、それを食した者はその年、疫病に罹らないとされている。また「あかだ」という名称の由来としては、梵語で「無病息災」の意をいう *agada*（アキヤダ）に因んだという説や、米粉を練り固め胡麻油で揚げた形状を「赤団子」と称し、これを略して「あかだ」となったという説などがある。いずれが本義か分からぬが、ここで大切なのは、その「真実」ではなく、厄除けで著名な津島神社の土産として相応しい「由緒」なのである。このように菓子葉に記された「由緒」をひもとくことは、菓子そのものの歴史や、それに纏わる伝承の形成、変遷過程を知るとともに、その地域の歴史を辿ることに繋がるといえよう。¹²⁾

三、菓子名の「由緒」からみえるもの

―菓子名からひもとく『万葉集』研究史―

菓子葉において中心に語られる「由緒」には、菓子自体、菓子名、あるいは店の創業などがあるが、次に、菓子名の「由緒」をひもとくことで、『万葉集』の研究史も浮かび上がってくるという事例を見てみよう。それは

長野県上田市の「みすゞ館」（株式会社飯島商店）である。「みすゞ館」は寒天・水飴を主材料として、杏・ぶどう・三宝柑・梅・桃・りんごという信州にちなんだ果実を使用して作られた、オブラートで包まれたゼリー状菓子である。その菓子葉は「みすゞ刈る信濃の国」と題され、「万葉の昔から、「みすゞ」とは信濃の国を表わす枕詞として親しまれてきました。その「みすゞ」とは、スズダケのこと。さわやかな大気と清冽な川の流れ、ゆたかな自然に抱かれた信濃の国を表しています。私たちは、その名に寄せて、ゆたかに育まれた自然の風味をそのままに、お届けするお菓子づくりの心を込めました」とある。また同社HPには、この枕詞が使用された『万葉集』の歌として、久米禪師と石川郎女の相聞歌（巻2・九六〇七）が、次のように掲げられている（傍線部・兼岡）。

み薦刈る信濃の真弓吾が引かばうま人さびて否と言はむかも 禪師

み薦刈る信濃の真弓引かずして弦著くるわざを知ると言わなくに 郎女

「み薦刈る」は、原文表記「水薦刈」「三薦刈」とあるもので、現在この語は「みこもかる」と訓むのが通説となっている。すなわち「みすゞ館」の由来となった「みすゞかる」という訓みは、現在の『万葉集』研究では否定されているのである。「みすゞかる」と訓む説は、荷田春満・信名『萬葉集童蒙抄』（享保十年（一七二五）頃成）が「す、きをかるしのとうけたる冠詞也。しなもしのも同事成。信濃の国は元来す、き多生茂たる野と見えたり。す、きの名産のところ故、国の名ともなりたるか。しのはす、きの事にて、しのす、きとも云なり。かるとは上代は信濃の国よりしのす、きをかりて貢献もしたるか」と唱え、さらに賀茂真淵が『冠辞考』（宝暦七年（一七五七）成）において、「三薦刈」を「三簞刈」の誤字とし、「みすゞかる」と訓んで以来、定着した訓である。

る。そして近代に入り、木村正辞『萬葉集美夫君志』（明治三二年（一九二一）刊）が、「篤」は『萬葉集』時代に使用例がないことから、真淵誤字説を否定し「三薦刈」としつづ、訓は「みずゞかる」のままとしたのを、武田祐吉『万葉集全註釈』（昭和二三～六年（一九四八～五二）、増訂版・昭和三二～二年（一九五六～七））において、「みこもかる」を提示、現在の訓となっている。

飯島商店の創業は明治三十七年、「みずゞ館」が発売されたのは明治末で、同店初代店主・飯島新三郎が名付けたものとされている¹⁵。明治末といえば、前述した『萬葉集美夫君志』は刊行されているものの、訓みは「みずゞかる」のままであり、「みずゞかる」が通説だった時代である。「みずゞ館」を生み出した新三郎氏は、このような当時の訓みに基づき、信濃国にかかる枕詞「みずゞかる」を、信州特産の果物と寒天を使用した新商品の名としたのだろう。しかし現在、訓みとしては否定されている「みずゞかる」だが、もし現行の訓「みこもかる」とし、この菓子を「みこも館」とした場合、その印象は大きく異なる。やはり、宝石のように輝く涼やかな寒天菓子である同商品は、「古風でありながら美しい響きの名前」（同店HP）である「みずゞ館」がふさわしく、このネーミングだからこそ、今なお全国的に愛される銘菓になっていると言えよう。

四、「菓子栞」を用いた授業の実践例

—「大学銘菓を作ろう」ワークショップ

「みずゞ館」の事例は、菓子栞に書かれた名の由来が、『万葉集』研究史にも展開していったもので、菓子とい

う身近な題材をもとに文学研究へ誘う効果的な事例として、筆者が講義で『万葉集』を扱う際にも、使用しているものである。さらに、菓子菓を大学授業に活用する実践例として、筆者が駒澤大学文学部講義「国文学特講Ⅰ」で行った事例を紹介する。これは「大学銘菓を作ろう!」というワークショップ型授業である。大学銘菓とは、いわゆる大学グッズの一環として作成された菓子のことで、たとえば千葉大学では「ピーナッツサブレ」(株式会社富井)、「ピーナッツせんべい」(株式会社はせべ)などが販売されている。前者は、ラフ画風にけやき会館周辺の景色が描かれた包装紙に、「千葉大学・ピーナッツサブレ」というロゴが示され、箱中に菓はない。また「ピーナッツせんべい」は、包装紙は工学部デザイン科の方によるデザインで、箱中には名刺大の菓があり、表にけやき会館の写真、裏には千葉大学の概要・理念等が説明されている。一方、駒澤大学には、松崎煎餅(東京都中央区)による瓦煎餅、ベルギーワッフル(マネケン)、メリーチョコレートなどの菓子がある。このうち松崎煎餅は、同社の製品である瓦煎餅「三味胴」に、「駒澤大学」という大学名が印字されたもので、菓子菓は封入されるものの、松崎煎餅の商品・会社説明に留まり、大学についての言及はない。一方、菓子菓は大学カラーである藤色で、中心に法輪が描かれ、仏教系大学である同大学を示したデザインになっている。授業では、このような大学銘菓を複数紹介した上で、その大学らしい銘菓を作ろうというコンセプトのもと、菓子の素材をはじめ、菓子名、パッケージ、菓子菓、価格等を考慮した「新・大学銘菓」を、まず個人で考えさせ、次にそれらをもとに四〜五名のグループで検討し、改めてグループごとに「銘菓」を一点考案させる。そして各グループ案を全体でプレゼンテーションした後に投票、最終的に一商品を決定するという、「架空商品開発」を行うものである。商品開発のためには、まず大学の特徴を検討するところから始まる。駒澤大学の場合、「仏教系(禪宗)大

学」「スポーツ強豪校（駅伝、硬式野球、サッカー等）」という二つが、各グループ共通して出されたモチーフであった。また菓子の素材としては、大学カラーの藤色を表現すべく紫芋を用いたものも多かった。その結果、学生から考案された例としては、「藤色の駒」（紫芋を用いた羊羹。表面には馬の絵の焼き印）、「折れない襷」（駅伝の襷をイメージした長形の堅焼き煎餅。ネーミングは「決して諦めない」という意味の「折れない心」をかけたもの）、「悟りまんじゅう」（ミルク餡の饅頭。中身の餡は、釈迦が悟りを拓く契機となった、スジャータから与えられた乳粥に因んだもの）など、大学の特徴を捉えたユニークなものが数多く考案された。そしてこのワークショップを終えた学生の感想として、「大学の歴史や特徴について、改めて知ることが出来た」「菓子開発から命名、パッケージ、葉作成、価格設定等、商品化まで、実際の商品がいかに考え抜かれているかを実感した」などの声が寄せられた。本ワークショップの主な効果として、①大学について、その歴史や特徴などを再認識する、②大学所在地周辺の特産物や歴史など、地域についての理解が深まる、③パッケージデザイン、葉本文の作成等、デザイン・文章表現の練習になる、④考案商品が採用されるための、効果的なプレゼンテーション能力の育成、などが挙げられよう。この試みは、あくまで「夢」の商品開発ではあるが、たとえば千葉大学の場合、千葉県はピーナッツのみならず、カブや大根、梨などの農産物や、海産物、酪農品など、豊かな食材に恵まれた地域である。さらに大学の機関としても、園芸学部や環境健康フィールド科学センターを有すなど、実現可能な基盤がある。また学生が開発した「大学銘菓」は、大学PRの観点でも効果的なものであり、「大学銘菓ワークショップ」は、いわゆる参加型授業として様々な可能性を秘めたものと思われる。

以上、菓子菓についての研究、および大学授業における活用等について述べてきたが、本稿でふれたのはその一端に過ぎない。菓子菓は、本文の内容分析は勿論、一枚紙、折紙状、巻物といった「形状」や、本文表記の「書体」や「デザイン」など、いわば書誌学的な観点からの分析も考えられる。さらに菓本文から、その時代をよみとくとという歴史資料の一つとして、たとえば、現在「鳩サブレ」で名高い神奈川県鎌倉市の「豊島屋」は、明治期の創業当時、「古代瓦煎餅」と称する、鎌倉幕府に関係する主要な建物の瓦をかたどったせんべいが看板商品であった。鈴木勇一郎によれば、その菓には「美術の神髄」「智識開発の御参考」といった、近代学術的な装いをまとった言葉が散見され、そこには、当時成立しつつあった古社寺の美術的な価値の学習、という意図が込められていたという¹⁴。このように、菓から現代史をよむという、歴史資料としての分析、さらに菓子に付加価値を与える「菓子大博覧会」や、いわゆる「皇室ブランド」の位置づけなども、同様に考えられよう¹⁵。

一方、菓子菓を研究材料とするためには、まず数多くの菓を収集する必要があるが、それらを整理し、研究や授業で活用するための基盤整備として、千葉大学アカデミック・リンク・センター共同研究部門によって、筆者が収集した菓子菓のうち約百点を電子化するとともに、それを元にした「デジタル資料集」の作成、EPUB化が進められている¹⁶。これは画面上で菓自体を拡大・縮小して見られるという電子書籍の特性は勿論、各菓子店舗のHPやWEBとリンクさせたもので、今後、研究や授業教材として、有力なツールとなることは間違いないだろう。このようなハード面の整備を活用しつつ、日本文化を研究する一素材として、菓子菓の可能性が未知数で

あることを指摘しつつ、摺筆する。

- (1) 「郷土菓子を楽しむための10のキーワード」(太陽の地図帖『郷土菓子 ふるさとの味を旅する』平凡社 二〇一三)
- (2) 『国史大辞典』(執筆・吉原健一郎)
- (3) 引用は、鶴月洋「江戸時代の宣伝文」とくに作家の書いた引札について」(『近代語研究』第一集 一九六五・九)に拠る。
- (4) 同、注3
- (5) 同、注3
- (6) 引札に関する研究は数多い。主なものとして増田太次郎『引札繪びら錦繪廣告』(誠文堂新光社 一九七七)、同『引札絵びら風俗史 新装版』(青蛙房 二〇一〇、初版一九八二)、井上隆明『江戸コマ―シャル文芸史』(高文堂出版社 一九八六)、谷峯威『江戸のコピーライター』(岩崎美術社 一九八六)、河又芳雄「『ひらふ神』にみる寛政期の京伝の執筆動向」(服部幸雄編・千葉大学大学院社会文化科学研究プロジェクト報告書『寛政期の前後における江戸文化の研究』二〇〇〇・三)、また江戸く明治初期の引札文を収集した書として、明治十六年(一八八三)刊の岡本竹二編『裨官必携戯文規範』がある(同書は『古今名家戯文規範』明治二五年刊(一八九二)として改版)。さらに江戸時代に作成された引札の貼込帳としては、木村兼葭堂『諸国板行帳』(天理大学附属天理図書館所蔵)が著名である。その翻刻に「諸国板行帖」(芸能史研究会編『日本庶民文化史資料集成 第十卷 数奇』三一書房 一九七六)、また、同資料から当時の大阪における菓子店等を考察した大島新一「大阪の和菓子屋繁盛記―木村兼葭堂の『諸国板行帖』を中心に―」(『和菓子』第七号 二〇〇〇・三)がある。また幕末の本草学者・田中芳男による貼込帳、『拮拾帳』を紹介したモリナガ・ヨウ『東京大学の学術遺産 拮拾帳』(メディアファクトリー 二〇一四)も参考になる。

- (7) ただし現存する江戸期の引札類の多くは、貼込帳の形式であり、それが広告として配布されたものか、それとも菓子箱や袋に封入されたものなのか、判別しがたいものも少なくない（浅野秀剛「菓子袋・菓子箱と商標」『和菓子』第十九号 二〇一二・三）。しかし本稿では、引札における「チラシ」「広告ビラ」という機能と、「菓子菓」の性質の相違という観点から、論を進める。
- (8) 「バリューマーケティングの扉を開く―なぜ広告は売れなくなったのか―」(『Business Insight』 12 二〇〇五・八 http://www.jimacco.jp/case/management_hint/detail.php?dt=53)
- (9) 同『おみやげと鉄道 名物で語る日本近代史』(講談社 二〇一三) 二二―三頁。本書は、菓子を中心とした日本各地の名物・土産の誕生を、近代の鉄道発達の歴史を中心に、内国博覧会や日清・日露戦争等、日本近代史の視点から論じたもので、同氏による「近代日本の名物菓子とおみやげ」(『和菓子』第二十一号 二〇一四・三)とともに、本稿は、同書に負うところが大きい。
- (10) 「ふるさとの名物」(『あじわい』 一八六号 全国銘産菓子工業協同組合 二〇一四・十)
- (11) あかだに関しては、嶋村博「あかだ―天王さんと人々を結ぶ菓子」(『愛知県史民俗調査報告書4 津島・尾張西部』愛知県史編さん専門委員会民俗部会編 二〇〇一・六)にその由来や歴史、具体的な製法等、詳細に論じられている。
- (12) 菓子の「由緒」を探究するという点について、江戸時代の事例として、山東京伝『米饅頭始』(安永九年(一七九〇)刊)がある。これは延宝年間(一六七三―一八一四)頃を発祥とする江戸金籠山名物・米饅頭の縁起を語った黄表紙で、京伝は『骨董集』(文化十一年(一八一四)刊)でも、その縁起を考証している。こうした動向について鈴木俊幸は、江戸という都市の成熟に伴い、往時の江戸を懐かしむとともに自分達のルーツを探ろうという欲求に結びついたのだと論じている(『黄表紙の中のお菓子たち』『和菓子』第十三号 二〇〇六・三)
- (13) 飯島商店HP <http://www.misuzuname.com/html/outline.html>
- (14) 同注9書

(15) 同注9書

(16) その概要は、千葉大学アカデミック・リンク・シンポジウム「つながる学び…アカデミック・リンクのこれまでとこれから」(二〇一四・十二・二二 於：千葉大学けやき会館)において、栃木博子・能登谷泰見・長丁光則(以上、同センター共同研究部門)・小野永貴(同センター)「デジタル教材作成支援の実績(共同研究部門における活動)」の中で報告された。